

特別寄稿

昭和女子大学創立100周年記念特別講座「未来とビジョンを語る大会議」  
テーマ別討論

# 母校（母港）に期待すること

～卒業生と在学生在が考える昭和女子大学が進むべき方向～

木村 葉子

Special Conference for the 100-year Anniversary of Showa Women's University:

“Grand Discussions of the Future and Vision” Thematic Discussion

What to Expect from your Alma Mater —The Direction Graduates and

Students Believe Showa Women's University should Take

KIMURA Yoko



(写真1) 当日の様子

## 1. 分科会の概要

2021年5月1日、「創立100周年記念特別講座：昭和女子大学の未来とビジョンを語る大会議」<sup>1)</sup>が開催された。5テーマ<sup>2)</sup>の分科会のうち、本セッション「母校（母港）に期待すること」では、新たなステージへとスタートを切った昭和女子大学について、卒業生4人と学生3人が母校での学びや、提言などを語り合った。

登壇者は、筆者木村葉子（毎日新聞社 学生新聞編集部長、毎日小学生新聞編集長、1990年・日本文学科卒）がファシリテーターを務め、卒業生として、市山千奈美氏（ポッシュ株式会社 人事部門採用・人材マーケティンググループマネージャー、1996年 短期大学部初等教育学科卒）、杉山麻喜氏（株式会社イーライフ 取締役CMO、1994年 英米文学科（現 英語コミュニケーション学科）卒、オンライン参加）、内藤諭子氏（会計検査院 第4局 農

林検査第1課 副長、1996年生活美学科（現 環境デザイン学科）卒であった（2021年5月時点）。在学生は、大住愛音（現代教養学科3年）、篠香楓（環境デザイン学科3年）、瀬戸井舞（管理栄養学科3年）の3名であった。

## 2. 机上だけではない学び・人間力の創出

卒業生が「社会に出てから役立ったと感じる母校の学び」として挙げたのは、「きめ細やかな学生指導」「机上に留まらないリベラルアーツ教育」「在学生、卒業生の縦横の絆」「異文化理解」であった。外資系企業に勤めていたり、海外のクライアントと取引があったりする卒業生からは、コミュニケーション力の高さや、マナーの良さ、世界の文化に通じていることの重要性が語られた。女性教養講座や文化研究講座等の教養系講座で得た、音楽、美術、文学などの知識は、国内外の経営者らとの会話で役立つことが披露された。また、教養があることやしぐさ、作法、身のこなしなどのソフィステイクーションが身につけていることは、尊敬される要素になることを、実体験を絡めて述べる卒業生もいた。学歴や社会的な地位が高いこと以上に、教養を身につけ、幅広い世代や多様な人々とのコミュニケーションができることは、「武器になる」という意見もあった。「在学中は退屈でしかなかった教養系講座や、参加するのが嫌だった学寮研修が、社会に出ると会話に役立ったり、大人の振る舞い方を自然と身につけられる手段だったりしたことに気づいた」と振り返った。



（写真2）卒業生登壇者

## 3. 理系学科の創設 さらなる多様性の推進を

在学生、卒業生から次の100年に向けスタートを切った昭和女子大学に望むこととして、主に二つの提言があった。一つは、「理系学科やIT系人材育成のためのシステム作り」、二つめは「さらなる国際化、多様化の推進」である。附属中高部出身の在学生からは、「理系志望者は、学園で学び続けることを希望しても外部受験せざるを得ない」と切実な思いが語られた。また卒業生からは、企業ではITを使いこなす力や、ロジカルシンキ

ングなど理系の素養が求められており、大学として理系学科が少ないことは弱みであるという指摘があった。ITエンジニアはどの企業でも需要が高く、特に女性エンジニアは求められる人材である。その人材を排出できていない現状は一刻も早く改善すべきで、他大学の理系学科との連携や情報系学科の設立によって、大学の教育力向上にもつながるとの提案があった。

また、独自の教育を評価する一方で、閉鎖性に課題が残るとの指摘もあった。在学生からは、インターカレッジサークルへの参加容認など、他大学との交流の活発化を求める声が挙がった。卒業生からも、海外からの教職員誘致や留学生の受け入れの活性化、より開かれた大学に変革することで、さらなる国際化や多様化の推進が提案された。

そして、女性教養講座や文化研究講座、学寮研修などの学びが、社会でいかに役立つのか、学生にその価値が十分に伝わっていないとの意見も出た。大学が発信する情報が学生に届いていない現状もあり、より一層の工夫が求められた。

#### 4. 18歳より、その後の4年間で決める人生

いわゆる高偏差値大学の出身者と日々働いている卒業生からは、「勉強ばかりしてきた人の中には、教養がなかったり、コミュニケーション力が低かったりする人がいる」との意見が出た。大学受験をする18歳では人生は決まらず、その後の4年間の努力が人生を決めると、卒業生から在学生へ、エールが贈られる場面もあった。

本セッションでは、在学生からは現在の学びや、学生生活での課題及び感想が語られた。登壇した在学生の感想は、「セッションの参加には不安な気持ちもあったが、卒業生らからの声がけで乗り切れた。学園ならではの卒業生との縦の繋がりを感じる事ができ、大変有意義であった(大住愛音)」「英語が上手に話せなくても良いが、多様性の理解



(写真3) 在学生登壇者

は必要だという考えに感銘を受けた。『大学生活4年間で逆転できる』という、卒業生の言葉が印象に残っている（篠香楓）。「学校行事には必ず意味があり、意図する能力を引き出すことができるものなのだ」と実感した。このセッション通して、多くの学生がその意義を感じられたのではないかと思う（瀬戸井舞）」であった。一方、卒業生は母校を巣立って初めて気づいた学びの豊かさや、素養の深さが、感謝の言葉とともに述べていた。

「『母校』は、社会の荒波に出た卒業生がいつでも集い、鋭気を養える『母港』であってほしい。大学には、卒業生、在学生の連携をさらに深めるような機会の創造を望みたい。次の100年に向けた新たな一歩を踏み出した母校の一助となるよう、卒業生も尽力したい」というファシリテーターである筆者のまとめをもって、閉会した。

今回の分科会は年齢も職業も異なる同窓生が集い、思いを一つにして意見交わすことができたことに、大変大きな意義があった。大学での4年間の学びは、人生100年時代においてはごくわずかな時間にすぎない。しかし、昭和女子大学が100年間受け継いだ建学の精神や伝統は、世代を超え時代にあわせて形を変えても、同窓生一人一人の人格の根幹に脈々と流れ続けている。学び舎で過ごした時期は違えども、同じ理念のもとに集った同窓生だからこそ、初めて席を同じくしても旧知の仲のように忌憚のない話し合いができた。分科会でのひとときは、「同窓の絆」の再認識につながった。4年間の大学生活で得られる学びは多種多様で、一人一人異なる。その学びをさらに個々人が深め発展させることが、母港である母校の発展につながると確信することができた。

## 注

- 1) 在学生会は女性教養講座の一環として参加した。
- 2) 昭和女子大学創立100周年記念特別講座「未来とビジョンを語る大会議」は、「キャリア」「グローバル」「健康」の3つの観点から、①「女性の働き方・経済・雇用」②「女性のリーダーシップの育成」③「Global campus, Global futureーグローバルに生きる力を育む」④「〈人生100年時代〉のsmart & active aging」⑤「母校（母港）に期待すること」の5つの分科会が開催された。

（きむら ようこ 毎日新聞社 学生新聞編集部長）